Ⅱ. 植　生　概　観

広野地区を基点とする30km 圏内の植生に関しては，宮脇昭・村上雄秀・鈴木伸一・鈴木邦雄・佐々木寧（1981）によって「広野地区およびその周辺域の植生―福島県南東部の植物社会学研究―」がまとめられている。この研究によれば，広野地区および周辺 30km 圏の植生は以下の通りである。

調査の対象となった広野地区および周辺域（30km）圏は，福島県の南東部にあり，太平洋に面し南北にながく延びる浜通りの低海抜地から阿武隈山地の東部にかけての一帯である。阿武隈山地は，三森山，五社山，大鷹鳥谷山，大滝根山など海抜600～1,000mの多くの峰々と夏井川，大久川，浅見川，木戸川，井出川，富岡川，熊川，請戸川などの河川とがおりなす比較的ゆるやかな地形を形成している。

この地域は，臨海の低海抜地から海抜 100 ～180 m までがヤブツバキクラス域，それ以高がブナクラス域の２つの植生域に区分される。

ヤブツバキクラスにまとめられる植生域は，関東地方以南では海抜 700m 付近まで上っているのに対し，福島県下では海抜 200m をこえない。しかも，原町がスダジイ林（ヤブコウジ―スダジイ群集）分布の北限にあたり，県全体としてヤブツバキクラス域の北限付近に位置しているため，モミ林（シキミ―モミ群集），モミの大木，ケヤキ林が多くみられる。しかし，ヤブツバキクラス域としては寒冷な気候条件下にあるため，タブノキ，アラカシ，ウラジロガシなどの常緑広葉樹の自然林を伐採，破壊した後の再生力は低い。ヤブツバキクラスにまとめられる常緑広葉樹の自然林は，富岡町夜ノ森のタブノキ林，いわき市下大越，藤間のスダジイ林，富岡町，浪江町，大熊町に点在するモミ林などに神社林，斜面林としてわずかに残存するにとどまる。いずれも小面積であり，人為的影響の攪乱を受けている。常緑広葉樹の自然林でも，風衝性の強い海岸前線では広野町浅見川，いわき市塩屋崎にみられるようにトベラ，マサキなどの低木林（マサキ―トベラ群集）となっている。ヤブツバキクラス域の自然植生は，現存植生が小面積の常緑広葉樹林の他に，都路街道，夏井川溪谷，富岡川などのケヤキ林，いわき市大越，新舞子の海岸砂丘植生（ハマボウフウクラス），沖積低地のヨシ湿原，木戸川，熊川，高瀬川他各河川のヤナギ林などをあげることができる。

ヤブツバキクラス域は，臨海の低海抜地に広がっており，そこに生育する植生は，さまざまな人為的干渉下にあり，立地条件に応じた発達をしている代償植生である。ヤブツバキクラス域の代償植生は，水田として広く利用されつくされている沖積低地を除く大部分がクリ，コナラ，イヌシデなどの夏緑広葉樹の二次林とスギ，アカマツ，クロマツの植林で占められている。アカマツ，クロマツ林は，海岸線付近に多くみられる。スギ植林は，ほぼ全山を占めるほど大規模に行われているが，斜面下部にとくに多い。植林，二次林などの伐採跡地，ススキ草原などは，調査

地内にモザイク状にみられるが，時間の経過とともに樹林植生へ遷移する遷移途上の植分が多い。

海抜 100 ～ 180m 以上は，ブナクラス域にまとめられ，アカシデ，イヌブナ，ブナ，サワグルミ，ケヤキなど夏緑広葉樹林が，（潜在）自然植生として広い面積を占める。ブナクラス域も，ヤブツバキクラス域と同様に，二次林，植林などの代償植生が優占している。しかし，ブナクラス域の自然植生は，モミ―イヌブナ林，イヌブナ林を中心に，高瀬渓谷，三森山，背戸峨廊，五社山，夏井川渓谷，都路街道沿いなどには比較的広い残存林分がみとめられる。また，ケヤキ林も，富岡川，夏井川渓谷，都路街道などにみられる。ブナクラス域の代償植生は，スギ植林，アカマツ植林を中心とする植林，クリ，コナラ，ミズナラの二次林で代表される。比較的新しい植林地は，ススキ草原あるいはマント群落となっている。さらに，カラマツ植林，モミ植林，シバ群落，耕作地，桑畑などが，モザイク状の広がりをみせている。ヤブツバキクラス域に広い面積を占めている水田や，畑地，桑畑など耕作地がブナクラス域では少ない。

広野地区および周辺域は，常緑広葉樹林域の上部から夏緑広葉樹林域の下部にあり，モミ，イヌブナで代表される，いわゆる推移帯，中間温帯ともいわれる植生域が含まれている。したがって，常緑広葉樹林，夏緑広葉樹林，あるいはその二次林において，地域的に特徴ある植生となっている。